

F.W.A.フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の 教育方法学的検討

—「遊戯の歌」(33)―(41)に見られる子どもの「精神」の成長—

児 玉 衣 子

序

掲題の主題の下にフレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の中の「遊戯の歌」全50編の検討を続けており、今回は第4回目であって「遊戯の歌」第2段階第3区分と目される(33)―(41)の歌の検討である。子どもの「精神」という把握と「遊戯の歌」の区分の根拠、およびこれまでの検討については、註1および註2に挙げた拙論を参照していただくと幸いである。

これまでと同様、各歌の内容としては題詞と詩と絵(欄外装飾画)と「欄外装飾画の説明」(以下「説明」と略記)を取り上げ、各歌を以下の3観点から検討する。

1. 本書の主人公の子どもについて、子どもの発達的に特徴的な表れが見出されるか、それに対して働きかけられているであろう遊戯はどのようなことがらを身体的目標、および精神的目標としているのか。
2. 子どもに語り聞かせるわけではないが、母親(両親および保育者³⁾)の内に持つておくべき精神的 content として、どのようなことがらが語られているのか。
3. その他、方法的に注目すべきことがら。

I 各歌の検討

(33)「炭焼き小屋」⁴⁾

1. 主人公の子ども

遊びは、テーブルに手首をつけて両手を屋根の形にするもので、主な運動は手首の背屈である。一見簡単であるが、手首を机の上で背屈させながら指先まで力を入れて伸ばすことができるほどに指の力が強くなるのは幼児期後期になってからだろう。

「説明」には、ザクセン選帝侯の先祖となった王子が敵軍に捕えられた時、炭焼きに助けられた故事を語って聞かせるようにという勧めがされている。フレーベルは『人間の教育』において子どもが男児(der Knabe)と呼ばれる位に成長すると現在の充実だけに飽き足らず現在在るものの過去の根拠や原因を知りたいと感じ始め、物語や伝説を求め始めるという⁵⁾。経験的には、このような故事を求めて聞いて喜ぶのは冒険譚を喜ぶ位の年頃、すなわち5才頃からではないかと思われる。

絵には男親と二人の少年が炭焼き仕事をしている様子が描かれ、詩では炭焼きの仕事は目立つものではないが私たち(絵を見る子ども)の毎日に必要なナイフ、スプーン、フォーク等の製作に不

児 玉 衣 子

可欠であることが歌われる。そして、仕事で汚れていても一生懸命働く人に敬意を表して子どもはご挨拶すると歌われ、職種に限らずに手の労働(die Hände Arbeit)への尊敬が教えられるべきであることが語られる。

詩と絵との両方ともに、炭焼き一鍛冶屋一母親にスープを飲ませてもらう子ども、が示され、子どもにとっても炭焼きの仕事から自分の口に至るまでの連関が理解しやすくなっている。

一見つながりのないものの中に存在する連関の環については既に子どもに気づかせるように図られてきた(⑦「草刈り」⑩「お菓子づくり」)。それで当然、この歌においても、連関の環は絵を見る親子の会話に出るように意図されていると見ることができる。

同時に、この区分全体における独自の狙いとして、労働生活の生き生きした様子に焦点をあてて子どもに語りかけられることが挙げられる⁶⁾。しかもこの区分に取り上げられている仕事には炭焼き、鍛冶屋、大工、園丁、車屋、指物師等、技術・技能の必要な仕事が多い。

また、絵の炭焼きの少年がこの絵本を見る幼児よりも大きくはあるが大人と幼児とを繋ぐ位の年齢にあたることは、幼児にとって、大人の労働とは単に真似たいだけでなく自分ももう少し大きくなれば参加できるという具体性を帯びた喜ばしい誇らしいわざとして位置づけられていくのに資すると思われる。

2. 母親(呼びかけの対象は母親のみ)の内に持つべき内容

題詞に、「僅かなものから多くのものを作り出し、動かし難いものを支配し、何気なさの内に大きな力を秘めているものがあります。母はそれを示しなさい。あなたの子どもを高めるよう」といわれる。

「説明」の冒頭で、目が人間の内部の世界とより高い精神界とを媒介する優れた機能をもつことに再言及((27)「壁にうつる光の小鳥」の「説明」に既に詳述)される。その上で、手についても、人間の内部の世界と外部の肉体および物象の世界とを媒介し、さらに外的現象と精神的思索とを媒介することが語られる。そこから、人間の手は神の恩恵のひとつという英国人の言への賛意が示された上で、「手は人間の神性の一表現ではなからうか。手は人間に、至る所において最も手近なもの些細なものからかくも多くのものを創造した創造主、を彷彿とさせてはいないか」と言われる。つまりフレーベルは、手を、(1)人間の内的世界と肉体を含めた外的世界との媒介、(2)人間の創造性を具体化させるもの、また、そのことにおいて神の似姿たる人間の神性を表現するために創られたものと理解している。

そこから、母親から子どもに教え勧めることがらとして、

- (1) 最初の子どものらしい遊びの時期から、子どもは自分の内的世界と外的世界とを手で結びつけて遊んでいるのだから、子どもがそのようにして十分に遊べるようにすること。
- (2) 自分の手に注意し、濫用(悪用)して自分自身を害なわないこと。
- (3) 手によって(生業の仕事、手塩にかけて、等の意味が含まれるだろう……筆者)自分を養い育ててくれる人への尊敬だけでなく、一般に手の労働によって活動する人への尊敬をも育てること。

以上の3点が語られる。

労働・仕事に関して、中岡哲郎によれば⁷⁾、働く者の働く対象に対する関係という点で、大自然に従い大自然から恵みを受ける労働と対照的な位置に立つのは手工業職人の労働であるという。すなわち後者における労働はもはや圧倒的な大自然に従う行為ではなく、労働の対象と労働者との関係は対等である。素材の性質に従うとはいえ素材は人間が加工しない限り変化せず、その意味で物を生む力は人間の側にある。物を生む能力が人間に帰属しているゆえに、人は材料の選定から道具の使い方、仕上げのコツに至るまでひとつのものを仕上げるために無数の項目を覚えて身につける。労働を、労働者が労働手段（道具）を用いて労働対象を加工し生産物に仕上げていく活動であるととらえる常識的な図式は、古代農夫の労働や機械システムに組み込まれた今日の労働よりも、むしろ手工業職人の労働の記述に最もふさわしい。以上のように中岡は説明している。

中岡は、労働（*die Arbeit*）という語に「労苦」という意味合いと「仕事」という意味合いとが存在することを述べた上で上述のような説明を行っているのであるが、さらに次のようにも語っている。すなわち、欧州のギルドに象徴される手工業労働は仕事という言葉で語るにふさわしい側面を有したばかりではない。史実として諸都市での宗教劇はギルドにより支えられていたのであって「仕事はまちがいなく個人の主体的活動として意識されているが、その意味は、人間の成長、市民的生活、神の恩寵との関係の中で与えられていた」。

仕事に必要な技術・技能に関わる以上のような社会史的把握に接すると、フレーベルの手の仕事理解はフレーベルならではの理解でありつつ、しかも社会の伝統的理解と決して無縁ではなかったであろうということが窺われる。

3. その他、方法的に注目すべきことがら

(1) 職業に関して

(イ) フレーベルはここで労働に貴賤のないことを子どもに教えるようにと母親に語っている。彼がその根拠にしているのは、手が人間に与えられた神性を具体化するからであり、労働は、その手の表現の中でも、人間に備えられた神性を最も責任をもって表現するあり方と考えられているからだろう。労働に貴賤のないことが今日の人権という考え方からではなく彼の神および人間に関する宗教的理解から打ち出されている。

(ロ) さらに、(33)－(41)の歌は、仕事、職業労働等に関わる歌の一連であって、この手前の(32)の歌で初めて父親に子育てへの参加の呼びかけが行なわれることについては、既に指摘した⁸⁾。ただし、仕事、職業労働等に何らかに関わって父子間の会話や見様見真似等が始まることはいえ、子どもの遊びを通して労働の意義や父親を含めて仕事をする人への尊敬を教えるのは母親の役割とされている。

(34) 「大工さん」

児 玉 衣 子

1. 主人公の子ども

この指遊びは、詩（歌）につれて指の役割や姿勢が変化する。つまり、右手人差し指は大工となり、左手人差し指の立ち木を切り倒し、短い丸太にし、やがて両人差し指とも親指と合わせられて家の梁、窓、破風になる。

既に発表した⁹⁾、各指が各々違った姿勢をとり、しかも左右の指が非対称の動きをする遊びという点で、この歌についてもここに至る迄に次第に高度化してきていることが指摘できる（⑩「小さな魚」－⑬「鳥の巣」－⑮「はとの家」－⑳「指ピアノ」）。

この歌では人差し指第一関節および第二関節¹⁰⁾まで曲げるようにさせているが、これは指にある程度の巧緻性が備わるまで難しい。しかも、歌に合わせて正確にするとすれば5才位以降でないと難しいと思われる。

ここでは、「楽しい家庭生活は、人間の健康によると同様、設備のよい家にもよる。その上に真の家庭的家庭心が加わる場合には殊にそうである。恐らく子どももそれを予感するから家や小屋を作るのをあんなに好むのだろう」といわれる。幼児期から児童期にかけての子どもが家や小屋を作って遊ぶことが大変に好きなのは、今日においても事実である。

フレーベルはこの詩で、大工の仕事は長い木を短くしたり、丸い木を平板にしたり、ざらざらすべすべに、曲がりを真直ぐに等いろいろあるが、それらはばらばらではなく組み合わせられ組み立てられてひとつの家になる、子どもを大事にする家になる、と歌う。

2. 母親

絵の一番上の題の下に太字で「子どもへの愛はあらゆることを工夫した、今度はご覧、手と指で一人の大工を作るのを」と書き加えられている。フレーベルはこの歌と次の(35)「小橋」との両方で大工の仕事の意義を強調している。推測される理由については次の歌の項で述べる

フレーベルは家と家庭生活との関係を、いわば皮膚と身体部分との関係であると捉えており楽しい家庭生活は、人間の健康によると同様、設備のよい家にもよるといふ。そして、子どももそれを予感しているのだが、そのおぼろげな感情や努力を自分で解する術を知らない。周囲の人々によって顧慮され育てられることは更に少ない。もしこの予感的衝動が子どもの中に育てられ発展させられるなら、あらゆる境遇における人間をどれ位変えることだろうか、と述べる。

そして、母親に対して、(1)子どもがその衝動から作っているものに表現される子どもの予感を汲み取り、注意深く育てるように、(2)大工とその技術を価値相当に尊敬し、彼が慎重に仕事をするのを観察するように、ということを求めている。

3. その他、方法的に注目すべきことがら

ここに捉えられた子どもの家作りの遊びは、今日でも、積木、箱積木、ダンボール等々さまざまな素材を用いて広く一般的に見出される。今日の「保育は幼児の生活である」という観点からすれば、それらの遊びに向けられる大人の主な関心は家自体にではなく、むしろ作った家を基地にして

子どもがどのように遊びを展開しているのかというところに行く。つまり、どのような内容の遊びか、友達関係は、等への関心が主になる。

『人間の教育』においてフレーベルは、7～10歳位の男児達の家や山川を作る遊びについて詳細に生き生きと語り、このような遊びが友達グループを形成することを述べている¹¹⁾。

しかし本歌の場合、家作り遊びを絵にも「説明」にも取り入れながら、家作りから発展する遊びの展開や友達関係の発展等については、フレーベルは兄弟妹間の仲間意識の深まり以外には言及していない。そうでなくて子どもが他のものでなく家を作るところに無意識に表現しているもの、つまり原因、土台にあたる場所への大人の注目と理解と育みとを要請する。しかもそれが子どもの予感という子ども自身にまだ意識化されずまして言語化され得ないものへの大人の接近の方法であるという。

(35) 「小さな橋」

1. 主人公の子ども

遊びの動作は(34)に比べてずっと簡単であるが、指を真直ぐに伸ばして指の付根の関節を直角にまげることは指にかなり力をいれなければできることではなく、やはり幼児期後期の遊びになると思われる。

詩では、小川の向こう岸に渡って花を見たい子どものために大工さんが小橋をかけてくれるありがとう上手な大工さん、と歌っているが、それ以上のことは述べられていない。しかし、子どもにとっては自力で行けない対岸に橋を架けてくれるというだけで嬉しい歌であろう。

2. 母親

母親に向かつては題詞に「遊びをしながら、子どもに、離れているものを結びつける工夫をさせなさい。そして人間の力は、一見どうにもならない隔たりや、ひとつになりがたい対立もちゃんと結びあえることも教えなさい」と語られる。「説明」ではさらに詳しく次のように語られる。「和解できないふたつの極はしばしば最も深い苦悩をもたらし、他方、予期しない調停は天の平和を心に、情操に、ことに家庭的家族生活にもたらすということを母のあなたよりも深く感じているものは誰もいない。……天と地という最大の両極を家庭以上の何が、家庭以外のどこで融和させられようか。だからあなたの子どもに、家（外面的に見える物）の中に家庭的平和のあることをわからせ、目に見えるものを与える者が目に見えないものをも与えることをわからせなさい」。この主張は、フレーベルの幼時の痛切な体験でありしかもその後 彼の人生の節目節目に甦ったという榛の花体験に彼が述べていることにつながる¹²⁾。

また、大工に関して、子どもには離れているものを結びつけてくれる人としてのみ紹介される。しかし母親にむかつては以下のように信仰的に語られる。最大に離れているもの、すなわち天と地（神と人間……筆者）とを地上において融和させる場として家庭、家庭的平和がある。そして、大

児 玉 衣 子

工はそのような場となる住居を造るだけではない。天父なる神は天と地とを和解させる仲保者として愛する息子を大工の息子として地上に送って下さったことを母親の生活行為に示して子どもに予感的にさとらせるように。つまり、大工の仕事は単なる労働の一種、手工業の一種ではなく、フレーベルが非常に大事にする分離した二極の仲保、媒介という働き、さらにそれを最高に実現して神と人間とを仲保するイエス・キリストという人格神の地上での職業につながるゆえに、くり返し言及される大切な仕事になっていることがわかる。

(36)「中庭の門」(37)「庭の門」

1. 主人公の子ども

動作は両手首を小指側に曲げて(尺屈)指先を突き合わせるものである。手首を正確に尺屈させるのが身体の運動としては眼目になると考えられる。

「中庭の門」では「これは何? 門(das Thor…原綴りのまま、隔字強調)です」から始まり、閉じられた庭の中に描かれたさまざまな家畜、家禽、鳩や蜜蜂等の名前とそれらの動作や動きの特性が挙げられ、最後に「門はしっかり閉めておけ。ただのひとも飛び出さず、皆自分の場所にいるように」と歌われる。

「庭の門」になると「これは何でしょう、庭(der Garten…隔字強調)にはいる門(太字強調)ですよ」と子どもの眼にもわかりやすい強調がされている。続いて園丁がこの庭に植えている花々の諸特性が「匂いのいい花、やさしい花、柔らかい毛の生えている花、つぼみの花、一對ずつ咲く花、小羊のように群れ咲く花」等に歌われ、最後は「門はしっかり閉まっていなければならない、お花に邪魔のこないように」と、ここでも門をしっかり閉めることが歌われる。

ただし、絵によれば、門は閉じられているとはいえ外に見える門であり、生垣もまた格子状の蔓である。しかも生垣の高さは子どもの背丈の半分位であって、子どもは生垣の花を摘んだりもたれて外を眺めたりしている。また、花園とはいえ花は僅かしか描き込まれておらず絵の中心になっているのは噴水であって、象徴的な印象を受ける¹³⁾。

2. 母親

(イ) 新しい指導方法について

題詞に「母の愛が愛撫しながらすることは、子どもがまだ理解しないように見えても、いつか子どもには人生の賜物となる。だから子どもの好むものを失う危険から護るように早くから教えよ」といわれる。

「説明」では、これまでにフレーベルが子どもの「精神」の成長にあわせた指導方法として語ってきたことがらが、彼にしては珍しいほど具体的に、また箇条書きにして次のように述べられる。

「この遊びの意味と贈物とは自ら明らかである。すなわち、第一には、子どもに彼が獲得したものを保持することを教えなさい。第二には、子どもを取り巻くものを認識(識別させ(erkennen

machen) なさい、そして まず最初は家や中庭で、庭や野原で、後には草原や森で、子どもが自分を取り巻くものの名前を探るようにさせなさい。子どもが事物の名前だけではなくそれらの諸特徴をも学ぶように、活動的諸特徴、行為だけではなくそれらの静止的なつまりそれらの性質をも知るように学ばせなさい」。

彼が「第一に」といって挙げている方法は、既に (3) 「塔の風見」において、遠くの風見鶏を手で真似ることによって自分の内に持つ、(4) 「おしまい」において、飲み終って眼には見えなくなったスープではあるが口、舌、喉を通ってお腹でこなれて血や肌になり保持されていることを教える、(27) 「壁にうつる光の小鳥」において、出張で長い間不在の父親の愛情を父親の眼差しを思い出すことにより心に保持する、等々に示されていた方法を改めて述べたものである。

「第二に」挙げられている方法についても、彼がこれ迄の歌に述べてきた子どもの教育方法を反復し、その上に新しいものをつけ加えるという構図になっているので、そのことを以下に説明する。

(第1a文) 子どもを取り巻くものを認識(識別)させる……(1) 「足をばたばた」以降全体。

(第1b文) そして、まず初めに家や中庭で、庭園や野原で、後には草原や森で、子どもが自分を取り巻くものの名前を知るようにする

……(1) 「足をばたばた」 (「これ何?」)

……(3) 「塔の風見」 (「どうして〇〇なの?」) (6) 「チックタック」

(8) 「鶏さんおいで」 (9) 「鳩さんおいで」 (15) 「はとの家」等

(第2文) 事物を名前だけでなくその特性(die Eigenschaft)によって知ることを教える。すなわち、事物をその活動的特性、その行為だけでなく、その静止的なもの、その性質によっても知ることを教える。

活動的特性……(3) 「塔の風見」 (動くものには動かす源がある。

子どもの問い「どのようにして?」「なぜ?」)

(10) 「小さな魚」 (真直ぐと曲がる)

(15) 「鳥の巣」 (鳥の生態的特徴を時、場所、仕方に広げて注目させる)

(28) 「小うさぎ」 (29) 「狼」 (30) 「猪」 (生態的特徴)

活動的、静的特性

……(15) 「鳥の巣」 (鳥と昆虫との違い)

(16) 「親指はすもも」 (指の名称の由来と動きの特徴)

静的特性、性質

……(5) 「味の歌」 (甘い、酸い、苦い、渋い)

(11) 「たてによこに」 (事物を大きさと数と形態によって認識することを教える)

(37) 「庭の門」 (子どもは植物を色彩と形において探知することができる
…初出)

上掲概括のような過程を経て、(37)の歌において新しく提示されるところの子どもの「精神の発

児 玉 衣 子

達に即した方法」とは、子どもが庭の植物に認める色彩および形（いずれも隔字強調）について、新しい見方で見るというものである。では、その新しい見方とはどのようなものなのだろうか。

第一に、色彩についてであるが、ばら色、緑、黄金色、等の色の名称を知ることについては既に(20)「指ピアノ」で言及された。(37)の歌になって教えられる色とは「やわらかい色」「簡素な色」「雑多な色」等、見る者の心情、美的感性、好み等と強く結びついて把握され、ひいてはその人の個性にさえ関わっていくところの色彩把握である。それは既に(5)「味の歌において「よい趣味」と呼ばれているところの正しい価値を見抜く直感的な力を養うことにも通じているのではないかと考えられるが、そのような主観を交え、主観に支えられた、あるいは主観を養うにさえ至るところの色彩把握の第一歩が、植物を対象にこの歌から始められている。

第二に、形について、(37)の歌になって初めて植物の今日の自然科学的な捉え方が入ってくる。すなわち、これまで事物の形は形態 (die Gestalt) において把握されることが言われてきた。この歌になって初めて形 (die Form) で捉えることがでてくる。つまり、「匂う花」「柔らかい毛のある花」「つぼみの花」「一對ずつ咲く花」「小羊のように群れている花」「鈴のような花」「光を放つようなもの」「騎手のように拍車をつけたもの」「蝸牛のようにうねうねしたもの」等、明らかに構造、形式、形状、法則性等の存在に気づいた自然科学的接近の第一歩が示される。

しかも、自然科学的把握の初歩でありながら「小羊のように」「騎手のように」「蝸牛のように」等、子どもの主観や感情と密接に結びついている。フレーベルは母親に向かってこの時期の子どもが上掲の方法で乳児期から導かれるものに対してどれ位深い感受性をもっているか注意を払ったことがあるか、この時期の子どもは殆ど魔法のようなやり方でものの性質や活動をあらわす言葉をさえ工夫するようだ、と述べている。そして、この時期の子どもの感受性に則った指導のあり方として、主観や感情と豊かに結びつきつつものの性質や活動を科学的に把握しようとする、そのような認識のあり方を示すのである。

以上、色彩と形との両方から明らかになることは、どちらも個々の子どもの感性、感情、心情等を土台とした客観的認識を勧め始めているということである。この方法はそれによってもたらされる個々の子どもの成長が知的領域に限定されるようなものではなく、主観性と客観性との両方の形成に関わっていることを明らかにしており、それはひいては個性形成に関わっていくと筆者には感じられる。

(ロ)閉じた門の中で育てられるもの

「門」によって守られた保護空間、注意深い母親という保護者によらなければ、子どもの上掲のような認識をもたらす感受性や認識の芽生え（それは果実（隔字強調）の芽生え（隔字強調）と理解されている）は害なわれて消失する、と彼はいう。

フレーベルが新しい子どものための施設を「子どもの庭」と名づけ、その「庭」の「門」をしっかり閉めることと主張するところには、すべての幼児の淡い柔らかい感性が注意深い大人による保護空間である中庭や庭園の中で、動植物を通して知的発達を導かれるばかりでなく、それらの生命

への共同感情を育まれることによって果実を結ぶ、という彼の主張が存在すると思われるが、それは続く(38)「小さな園丁」(39)「にのいの歌」に、より明確に主張されることになる。

3. その他、方法的に注目すべきことがら

(イ) 上述に同じ。

(ロ) 50編の歌の中で、子どもの眼にふれる詩の部分に太字強調が見出されるのは、(16)「親指はすもも」(17)「親指のごあいさつ」(37)「庭の門」のみである。その内、(16)(17)では触覚(皮膚感覚)の大部を占める各指の名称が太字で示され、各指の特徴的なことがらが紹介されたが、触覚については触れられなかった。それが(37)に至って指を用いての(触覚による)認識に注目させられることになる。そして、手の仕事は人間の神性をあらわし、神性を磨くという、この区分の中心になる主張がなされる。また同じく(37)で「庭」(太字強調)の「門」(太字強調)を閉めるように指示される。

以上、(イ)(ロ)に挙げたようなフレーベルの意図的構成からすれば、(37)「庭の門」の歌は、第2段階第3区分の中でも意図的に中心的な位置に置かれていると見ることができるだろう。

(38)「小さな園丁」

1. 主人公の子ども

前の歌で、門を閉じた庭の中のものを注意深く知るように導かれた子どもは、この歌からいよいよ庭の中で植物の世話を始める。今迄は、自然にあるもの、あるいは既に誰か大人が世話しているものを見ていた子どもは、ここから、責任をもって自分の役割を果たす仕事に参加し始める。しかもその仕事は生命を労わり育てる仕事である。

詩では、上手に水をやるなら小さなつぼみは開き甘い香でご挨拶、親切へのお礼、と言われる。

動作は、片手は百合のつぼみになり、他方の手は如露になり、水をやるにつれてつぼみが花開くというもので各々の手の動作自体も動作のリズムも異なり大変高度である。他の花でなく百合であるところにフレーベルの思い入れが感じられるが、同時に白百合が聖母マリアと結びつけられたり、ロマン派絵画において光の具象化とされているようなキリスト教文化が背景にあることも感じられる¹⁴⁾。

2. 母親および父親

題詞に、「生命をいたわる子どもの心を発育させようと思うなら、生命をいたわりたがるようにさせなさい。内面の生命をいたわる準備をさせようと思うなら、できるだけ生命をいたわる喜びを子どもに与えなさい」と言われる。

絵は三種類の百合の花とおだまき草の花が縁取りになり、中央後方の四阿のさらに背後にははるかに教会堂が望まれる¹⁵⁾。前面の畑にいる二人の子どもの内、前方の少女は如露で水をやってい

児 玉 衣 子

る。他方、後方の少年は見知らぬ老人に施しをして精一杯のいたわりを見せている。

この見知らぬ老人について、フレーベルが子どもの成長の特に留意すべき三側面として「身体」「自己感情の表れとしての他者との人格的關係」「薄明るくなりゆく精神」を設けた内、「他者との人格的關係」の観点からすれば、ひとつの注目すべき位置づけが認められることについては既に註8に挙げた論文において明らかにした。

フレーベルは「説明」において、この遊戯を二、三回もして見せれば子どもはすぐに模倣すると述べる。そして、教育方法として子どもが真似をして一緒にしたがる時期に模倣を積極的に活用するようにと勧め、この時期に大人が邪魔扱いをするなら双方とも後に多大の苦勞を負うことを述べている。模倣のことに関しても彼は既に『人間の教育』に詳述しており¹⁶⁾、本歌はその再表現といえる。

3. その他、方法的に注目すべきことがら

上述に同じ。

(39) 「においの歌」

1. 主人公の子ども

「庭」の中の花畑が想定されている。ここでは親が子どもに花の匂いを嗅ぐことを勧めて「こんなによく匂う理由は何だろう、天使がお前を香りで喜ばせていつている、『子どもが私（天使）を見ないでも私によって香りが出る』」と歌いかけている。

これはフレーベルが親の立場として、花の香を天上の存在の賛美に結びつけ、子どもの植物の世話が即座に植物の返礼としての成長、開花、結実に結びつくのではなく天恵の介在を子どもに示唆しているのだと思われる。その意味で、子どもの世話と植物の成長とはgive and take の関係ではなく、大きな連関（(7)「草刈り」(12)「お菓子づくり」）の環の 一環に位置づけられるべく意図されていると思われる。

2. 母親

一般に感覚の訓練は外的なものの認識にとどまらずに、それを自分の内部および精神に近づけ、さらに外的なものにその精神を認めるために重要であること、とりわけ味覚においてそうであること、味覚と嗅覚とは密接に関係すること、さらに転化して道徳的訓練においてさえ味覚の訓練の大切であること、以上のことが既に(5)「味の歌」において述べられていたことが再確認される。その上で、この密接な関係にあるとされる嗅覚と味覚との大切さが、さらに以下の二点にまとめられている。

第一に、生命の維持のために有益なものや有害なものが啓示されるには、嗅覚と味覚との相補う働きがある。また、感覚の訓練は精神的生命のためにも大事である。だから、感覚の訓練醇化、向

上は極めて大切である。

第二に、すべてそれ自身よいもの、健全なもの、向上的なものであっても、過度に享受すればたちまちその正反対を引き起こす。よい匂いの花であっても空間に対して多すぎれば頭痛をひきおこす。また利己的に美しいものやよいものを自分の周囲に集めすぎるなら他の人には僅かしか残らない、ということも生じる。

以上のような内容とともに、フレーベルは、嗅覚の訓練は味覚および成熟したものと未熟なものとの違いを判断し、避けて注意する感覚（(5)「味の歌」において味覚の精神的転化として既述……筆者注）の訓練と同様に大切であると語る。

味覚も嗅覚も視覚では感じ取れない何らかの異状を感じ取る、つまり外観ではわからない異常を見破る力を備えることができる。そしてそれは精神的にも転化される。フレーベルが第一点で言おうとするのはそういうことであろう。村上陽一郎によれば中世の価値体系が崩壊したあとのルネサンス—近世期において、直感的な価値判断はきわめて重要な意味をもっていたという。そして「よい感覚」が「よい趣味」に通じ「よい趣味」とは「正しい価値を見抜く能力」と捉えられた歴史があるという¹⁷⁾。フレーベル思想のこの点を詳細に明らかにすることは筆者の手にあまるが、(5)「味の歌」における「よい趣味」の強調といい本箇所での嗅覚と味覚とに関する言及といい、フレーベルがこのような哲学的論議に何らかに通じており、人間形成の基本に位置づく重要性を見出していたことについては明らかであるといえよう。この他、植物が子どもの世話に応じて成長し花咲き匂う、そのような植物の生命への子どもの喜びは、しかし、ただ世話をさせさえすれば子どもの内に自然に生じるとはフレーベルは考えていない。「ああ、お母さん、植物や花もあなたのように私たちを愛してくれている！」という子どもの喜びが如実に示すように、幼児の行う植物の世話では、子どもを植物との人格的關係に入れて、植物の成長を子ども自身の喜びに導くのが大人の役割とされているのである。そして、その土台には、親の愛を子どもが受けとめている、そのような状況が存在している。

3. その他、方法的に注目すべきことから

「遊戯の歌」の最初からフレーベルの幼児教育の目標のひとつの柱と目され¹⁸⁾、また既に何度も強調されたように（(5) (20) (27)）、フレーベルは感覚器官の訓練を重視している。それは直接には認知、感情、思考等に結びつき、さらには上述の「よい趣味」＝「正しい価値判断」に結びつけられているが、それらにとどまらず彼のいう子どもの予感という理解（前理解というべきかもしれない）のあり方に関わっていることがこの箇所から明らかになる。

彼は、認知や既にある知識に基づく思考等による理解以前から子どもに備わる予感という理解のあり方を確信している。予感とは、ここでは草花の形や匂いに表れる多様さに何らかの法則性の存在を感じ、それをもっと大きな何かにつながることをワクワクする思いで受けとめて、将来、その意味が明らかになることを感じる能力ということができる。

フレーベルは子ども向けの歌詞に「子どもが私（天使）を見なくても私によって香りが出る」と

児 玉 衣 子

歌い、大人向けの「説明」の後尾の詩では「お前たち植物がまだごく小さい時、お前たちの中には天使が住んでいる；いいえ お前たち自身が天使であろうとする、私（子ども……筆者」注）が決して孤独でないように。お前たちは私の心を動かそうとする、私を父のもとへ導こうとする、その愛の呼び声によって お前たちや私を創造された父のもとへ。」と歌う。この歌でフレーベルは、五感による自然の事物の知的理解からそれら自然の多様な作用を成り立たせる存在を親しみをもって感じ取るという理解のあり方へと話をもっていつているのであるが、それは、天使とは、神とは、等を問うところのキリスト教教義に導くためではなく子どもの新しい知的世界がより大きな統一ある世界理解へと導かれるためであることが明らかになる。彼がこのような理解のあり方を子どもにも親にも提示するのは、子ども自身が無意識の内に大きな統一ある世界を予感し、求めており、新しい知的世界はそこに位置づけられて初めて子どもの世界が豊かになり成長するという彼の確信に基づく、と心得る。筆者はこの確信に、ここでもフレーベルの子ども時代だけでなくその後の生涯の節目節目に甦って影響を与え続けたという榛の花体験を思い起さずにはいられない。

(40) 「車屋さん」

1. 主人公の子ども

遊戯は、はじめ車の心棒をはめ込む穴作りの動作を真似て両腕で水平に輪を描き、次に車輪の動きを真似て両腕で縦に輪を描くものである。

詩は、車作りの仕事を注視する子どもの眼差しを彷彿とさせる。

絵は盛沢山に6個の場面が描かれていてそれだけでも活況を呈する。車大工の仕事の2場面、労働および子どもの輪遊びを描く2場面、大砲車の行軍を描く1場面、ギリシア神話的な1場面である。

第2段階第3区分は仕事・労働を題材にした絵が多いので題材も動きも明確であり、絵本を見る楽しみを母親との会話に頼らず子ども自身だけでも見つけやすいのであるが、中でもこの歌の絵はその特徴が著しい。つまり第2段階第3区分に入る頃には、子どもは自らの行動圏内で見聞できる事象に関してはかなりさまざまな経験と観察力とを備えていて、それらを絵本に見出すと自分一人でも楽しめる位までに成長しているだろうと思われる。

ここから新しく、日常的な題材に加えて軍隊、神話（(40)の歌）、聖書中の物語（(41)の歌）等、日常性から離れた題材が付け加えられている。起伏の激しい物語を胸を躍らせて聞き始める時期にあると見ることが出来る。また、これらの見慣れない絵は子どもの疑問、質問を誘発するだろう。非日常、古代等の物語、伝承話の意義についてフレーベルがこの時期の子どもに大切なこととして語っていることについては既に註5にふれた。

2. 母親

大人のすることで子どもの注意を惹き起さないものはひとつもない。殊に職人のすることはそう

である。このように述べてフレーベルは人間の手の仕事の重要性、人間の手による創造に対する子どもの欲望を育むことの大切さを反復し、その報酬は平和と快活を得ることであると説く。

彼は子どもにとって車輪（das Rad）の意味が後に忠告（der Rat）に通じていくことを願って解説している。しかし、この点は言葉の語呂合わせに傾いていると筆者には感じられる。

3. その他、方法的に注目すべきことがら

1. に重複。

(41) 「建具屋さん」

1. 主人公の子ども

遊戯は両拳を鉋のように水平動させるだけである。

詩は指物師が鉋をかけるところを「机を平らかに」「長く長く」等歌われる。

絵の下側では指物師が鉋かけをしている傍らで子どもがそれを真似ている。絵の上側、つまり左側の古代の石積みと右側の古代神殿のような柱石に支えられた階上には旧約聖書の有名な箇所であるゴリアトと少年ダビデが描かれている¹⁹⁾。また、各々の柱石には彼らに関連させてであろう、左側には枯木（上半分がゴリアトの槍になっている）とラップが、右側には若木と豎琴が添えられている。

音調（der Ton）が数および運動と結びついていることについては、子どもは既に(20)「指ピアノ」で教えられた。ここではさらに音調は例えば物質の質、形、時間の長さ等とも密接に結びついていることが解説される。

2. 母親

ここでは音調から時間や空間に話が行き、それらから長い、短い、それらの連結等の多様性に子どもを導くことが語られる。例えば絵の中に長短を探したり、あるいは「しばらく外にいてもよろしい。でもあまり長くはいけませんよ」といった類の理解に導く等である。(10)「小さな魚」では曲直のみを絵に探すように勧めたが、同じようにここでは絵に長短のみを探して遊ぶようにとフレーベルは指示している。

また聖書中の人物については、外的大きさは必ずしも内的大きさを前提とせず逆もまた同様である、ということ子どもに示せばよいと語っている。

なお、今日の日本の発達診断テストによれば、一般的に長短の比較が理解されるようになるのは、2歳半から3歳に至る頃とされているようである²⁰⁾。ただし、上述の時間の長さのような個人の主観的判断に委ねられるところの状況に応じた比較判断が可能になるのは、(37)「庭の門」の新しい指導方法に導かれて暫らく後のことだろう。

児 玉 衣 子

Ⅱ 第2段階第3区分の特徴

1. 内容上の特徴については、これまで同様、50編全部の検討を終えてから発言したい。

2. 構成上の特徴

過去の発表において明らかにしてきたように、フレーベルは本書を子どもの発達に沿わせつつ、しかも非常に意図的に構成している。これまで各区分のほぼ中央部に強制的な歌の配置が見出されてきた。今回の検討においても同様に、(37)「庭の門」に特に彼の思いが強く表れていると感ぜられる。理由はこの歌の項に述べたとおりである。これを図示すると本稿末尾の図のようになる。

註

- 1) 児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討—子どもの『薄明るくなり始めた精神の認めること』について—」『乳幼児教育学研究』1号、日本乳幼児教育学会、1992、27—40頁。
- 2) 児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討—『遊戯の歌』(1)―(10)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』25号、1993。
児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討—『遊戯の歌』(11)―(23)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』27号、1995。
- 3) ここから保育者および父親がフレーベルの語りかける対象に入ることについては、児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と遊戯の歌』における子どもの『他者との人格的關係』の発展—今日の保育内容編成の観点からの一考察—」『人間教育の探求』4号、日本ペスタロッチー・フレーベル学会、1991、37—54頁、を参照していただくと幸いである。
- 4) 歌題についてはこれまで通り莊司雅子訳「母の歌と愛撫の歌」『フレーベル全集』第五巻所収、を用いさせていただいた。
ただし歌の番号については、京都大学教育学部所蔵の初版と目される本（絵が真正のエッチングである。ここから生じると思われるが頁数のカウントが頁ではなく葉で行われている。絵と文字との二度印刷の形跡が認められる。本のサイズが米国のThe National Union Catalogue Pre-1956 Imprints, Vol. 186記載の初版と同一である等）の目次にならって、29「狼」30「猪」とし、以降、歌番号をひとつずつずらさせていただいた。
- 5) フレーベル著荒井武訳『人間の教育』（上）、岩波文庫、1964、150—151頁。
- 6) (33)の歌から(41)の歌まで全部、話題としても仕事、労働を取り扱っている。
- 7) 中岡哲郎「労働」『大百科事典』15巻、平凡社、1985、1039—1041頁。
- 8) 註3) 論文参照。
- 9) 児玉衣子「『母の歌と愛撫の歌』における動作の系統性」『日本保育学会第41回大会論文集』、1988、536—537頁。
- 10) 指の第一関節（遠位指節関節）、第二関節（近位指節関節）

F.W.A.フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討

指の付根の関節（中手指節関節）

- 11) 『人間の教育』（上）、140-144頁参照。
- 12) フレーベル著長田新訳『フレーベル自伝』岩波文庫、1949、18-19頁。
「母の歌と愛撫の歌」『フレーベル全集』5巻、261-263頁参照。
岡林洋「憧憬の表現・ルングのアラベスク的風景<一日の四つの時>」神林恒道編『ドイツ・ロマン主義の世界』法律文化社、1990、57-65頁参照。
春山行夫『花の文化史』講談社、1980、116頁参照。
- 13) このことについては矢野智司の明晰な解釈が参考になる。矢野智司『子どもという思想』、玉川大学出版部、1995、101-123頁参照。
- 14) 『フレーベル自伝』、133-134頁。
フレーベル「1836年は生命の革新を要求する」『フレーベル全集』3巻、522-523頁。
- 15) このことについても註13)に挙げた矢野著書118-123頁参照。
- 16) 『人間の教育』（上）、131-155頁参照。
- 17) 村上陽一郎「趣味」『日本大百科全書』11巻、小学館、1986、709頁。
- 18) 註1論文参照。
- 19) サムエル記（上）17章1節～58節
- 20) 嶋津峯真監修『新版K式発達検査法』ナカニシヤ出版、1985、411頁参照。

図

